論文の内容の要旨

論文題目：“Musicologie”の誕生

— フランスにおける音楽認識の近代化

氏名：山上揚平

本論は、19 世紀終わりから 20 世紀初頭にかけてのフランス音楽文化の近代化に関して、特に音楽学の誕生という現象に着目することを通して、音楽観あるいは音楽認識の次元での変容に光を当てようというものである。この試みはまた逆に、フランス音楽思想史及び文化史研究の観点からフランス近代音楽学の誕生という出来事の意義を再考するものであるとも言える。従って本論はこの事象を、西洋諸国が近代化の流れの中で等しく行ってきたアカデミック･ディシプリンのささやかな改編として一般化するのでは無く、まさに「フランスの」固有の知的文化現象として捉えることを目指す。制度化された一ディシプリンとしての「音楽学」の歴史研究ではなく、そのように固定化される以前の様々な発展可能性を秘めていた知的状況、未だ音楽学ならざる"musicologie"を描きだすことこそが本論の主眼である。

第一章「musicologie の歴史的及び概念的考察」では本論が議論の対象とする musicologie なるものの定義づけと、その一般的な特色を論じる。1870 年代からその定義が曖昧なままに使われ始めた musicologie の語は、その不

確かな内実とは裏腹に、共通したある特定の態度と結びついていた。それは、引用の寄せ集めと主観的な意見からなるそれまでの音楽著述に対し、自らを信憑性ある資料に基づいた客観的な言説であると差別化する姿勢である。つまり musicologie とは、それ自体が既存の「音楽の語り方」への批判運動であったのである。またこの運動の推進者たちにとって、音楽の新しい学問を興そうという願いは、音楽が実証的学問の対象としての価値を有することをフランス社会に認めさせること、いわば、音楽芸術の社会的地位の向上というより大きな問題と結びついていた。以上のような問題意識のもと音楽の学問を実践していた、あるいはそれ自体を論じていた言説活動を「音楽学的」言説と定義し、以降の議論の直接の対象に定める。

1917 年 3 月 17 日、musicologie の運動の象徴的成果の一つであるフランス音楽学会（Société française de musicologie）が誕生する。それまで専ら既存の様々な学術領域の集合体として描かれてきた「音楽の学問」だが、学会創設の声明文では、新しい学問"Musicologie"の目的は「音楽と音楽家の歴史、音楽美学と音楽理論の研究である」と定義されていた。本論はこの定義を musicologie の概念形成における重要なメルクマーレと捉えると共に、この「歴史」、「美学」、「理論」の分類に則って、それぞれの領域と関連すると思われる「音楽学的」言説を章毎に分析していく。それらが従来の「音楽著述 musicographie」とどのように異なる新しい音楽観、あるいは音楽認識の形を提示し、また逆にどのような側面を引き継いだのかが、第二章から第四章の争点となる。

第二章「音楽と歴史記述」では、まず「音楽の歴史」自体に関する認識の変化を検討するに当たり、音楽史とは一体「誰が」「何のため」に学び、探求するものだったのかという問題を取り上げる。フランス社会における音楽史研究･教育を強く訴えていた musicologie の歴史家（J. コンバリゥ、P. オブリ、R. ロランら）の言説を、彼らが科学以前として糾弾した 19 世紀中葉までのフランス音楽史研究家（F-J. フェティス、F. ダンジュー、J. ドルティーグら）の言説や、あるいは Musikwissenschaft の言説と比較することで、その特色を浮かび上がらせる。特に本章では、音楽史が音楽家以外にとっても価値を有するという musicologie の主張の根底に、19 世紀フランス歴史学の影響を大きく受けた「一般史」の概念が重要な役割を果たしていたことが明らかにされるだろう。

続いて本章の後半では musicologie の歴史記述自体の特色が論じられる。

musicologie 以前と以後とを分かつのは方法的には実証的文献学の手法であり、理念的には「一般史」の概念であったが、ここでは特に後者の影響が、作品や作曲家そのもの以上に、それらの間にある通時的及び共時的関係性に焦点をおいた、文化史的、社会学的著述を生み出すことになった点に着目する。

第三章「近代的心理学の誕生と音楽美学」では、美学的な問題を扱った音楽著述が、同時代の「新しい心理学」の誕生から如何に大きな影響を受けていたかに注目する。観念論美学やロマン主義美学が「形而上的なもの」として退けられる実証的気風の中、同等の問題を普遍的、実証的に扱える手法としてフランスで期待されていたのは「心理学」であった。

まず本章では「新しい心理学」の父 Th. リボや、彼の『哲学評論』の寄稿者であり、新しい「音楽の学問」として「音楽心理学」を試みた哲学教授 Ch. レヴェック、L. ドリアックらの音楽論を取り上げる。彼らは必ずしも常に唯物論的な心理学者ではなかったが、音楽の語り方の刷新の為に最新の科学的成果を積極的に音楽著述へと導入し、従来の心理学的音楽美学とそれらの融合を図っていた。

続いて本章では、厳密な科学としての「新しい心理学」のイメージを築いていた実験心理学あるいは生理学的心理学における実験的音楽研究を取り上げ、そこでの音楽認識の特色を検討する。呼吸器、循環器など様々な系を測定対象とした心理学者（A. ビネ、Ch. フェレら）の実験は、「音楽を聴く心理的プロセスに伴う身体の変化を詳細に観察する事によって、音楽的感情反応に固有の性質を明らかにすること」という目的を達することは出来なかったが、音楽の身体への「直接的な」生理作用を実証的に裏付けただけでなく、その種の作用の問題と「音楽的感情」などの美学的な問題との線引きを明確にする事によって、その後の音楽心理学の方向性に影響を与えることになったと考えられる。

更に本章は「新しい心理学」のもう一つの側面である病理心理学と音楽との関わりにも着目する。19 世紀の失語症研究の影響を受けた「失音楽症」の研究（J.-M. シャルコー、J. アンジェニエーロら）は、「音楽言語」を巡る議論に新しい刺激を与え、伝統的な話し言葉モデルに基づく表現伝達のツールとしての音楽言語論（J.-J. ルソー、H. スペンサーら）から「内的言語」モデルに基づく思考のツールとしての音楽言語論（J. コンバリゥ、G. ブルレら）への橋渡しとなったと考えられる。

第四章「演奏と解釈の「実証的」理論」では、音楽の実践と直接関わる最も特殊音楽的であると見なされるこれらの領域においても、musicologie の思潮が ――つまり実証科学の発展の影響の下になされた、学問的に音楽を扱わなくてはならないという態度変更が―― 新しい音楽の捉え方を生み出しつつあったことを明らかにする。まず章の前半では音楽演奏や楽譜校訂に際し実証的指針を与えることを期待されたリズム理論（M. リュシィ、R. ヴェストファールら）を取り上げ、これらが自然科学をモデルとした学問モデルの影響と共に、実証的文献学の最新の成果と関係を持っていたことを指摘する。後半では生理学的心理学の知見を活用したピアノの習得を巡るユニークなアプローチ（ビネ、M.ジャエル）を取り上げ、そのアプローチの背後にある新しい音楽観を論じる。

最後に結論部では、これまで論じてきた事例に基づき、フランス近代音楽学を生み出す直接の原動力となった musicologique な言説活動が、まさに当時のフランスの音楽文化や社会状況の産物であったことを確認する。更にはそれらが現代のフランス音楽学及び音楽文化の中にもその影響を留めていることが示唆されるであろう。